

イラクの地方議会選挙

平成 21 年 2 月 23 日

大野元裕

1 月末、イラクにおいて戦後二度目の地方議会選挙が実施された。地方議会選挙法に基づき実施された今回の選挙には、イラクの全 18 県の内 14 県が参加した。

1. 選挙のシステム等

(1) 全体的システム

投票は、政党の名前が書かれた用紙に政党もしくは候補者をチェックする秘密投票で実施され、政党は 3 名以上の県別のリストを作り選挙活動を実施した。前回と異なるのは、個人に対しても投票できるようになったこと及び女性の取り扱いである。前回は 25%以上の女性議員を保証したが、今回は 3 分の 1 以上の女性をリストに載せるという形に改められた。この場合、政党はリストの下位に女性を集中させることができるようになり、女性の参加という意味では後退だという指摘もなされたが、これらの批判もあり、結局は 3 分の 1 の女性議員を含むという形に落ち着いた。また、治安上の懸念が比較的低下したことから、候補者の名前を出して選挙活動をしなくても暗殺の危険性が減じ、選挙は公に名前を出して実施された。有権者は、配給表等を提示して事前に有権者登録を実施し、名簿に記載された氏名を確認し、投票後には青いインクを指につけて投票済みとする方法が今回も採用された。

(2) 概要

今回の選挙は 18 県の内 14 県において、総計 440 議席をめぐる 14,000 名の候補者が立候補した。投票率は 51%と、予測されたよりも低かった。

2. 選挙の意義

今次選挙は、主として以下のような意義があったものと考えられる。

(1) 安全で円滑な選挙の実施

今回の選挙は、相対的に安全に選挙が実施された。投票所付近で爆弾が発見されたり、5 名の候補者が殺害されたりと問題も発生したが、これまでの選挙と比較すれば、はるかに安全に選挙が実施された。前回の選挙のように、投票ができない投票所があったり、どの時間帯に行けば襲われにくいかという噂が回ったり、あるいは安全のために早い時間に投票所が閉まるような状況と比較すれば、有権者のために投票時間が 1 時間繰り下げられた今回は全く異なった。不安視されたニノワ、ディヤーラ等の県でも大きな事件は発生しなかった。実際のところ、治安が改善したという印象を国民に広く誇示する機会となったという意味では、大きな成果であったと言える。

投票所で候補者の名前がない、投票所の案内が不十分、あるいは選挙違反があったとの

主張も一部にあるが、選挙結果に重大な影響を及ぼす不正はなかったとされている。

(2) 国民参加

前回の総選挙はほとんどのスンニー派政党がボイコットし、地方議会の議席が宗派・民族と比較しアンバランスになり、その後の政治的問題へとつながり、あるいは宗派・民族対立を煽る要因の一つとなった。今回の選挙は主要な政党がほぼすべて参加する初めての選挙となり、国民の多くは戦後初の民主主義への参加を実感することになった。

その一方で投票率が低い一因には、国民の中に選挙参加への失望もあったように思われる。たとえばイラク・イスラーム最高評議会（SICI）のような宗教政党による統治に期待して前回の選挙まで彼らを支持しながらも安定や生活の向上が実感できない人々は、宗教指導者による宗教政党への投票呼びかけがありながらも、SICI への投票に躊躇し、あるいは強引な政策を進めるマーリキー首相支持もできず、棄権したのかもしれない。しかし結果としては、現在のイラクの宗派・民族比率に比較的相応で、それぞれの勢力図がある程度国民に納得できる形で出されたようにも思われる。

(3) 政治家の実績への評価

イラクの安定を一定程度進展させて実績を強調し、重要なメディア等を握って広報戦略を遂行できたマーリキー首相のダアワ党および首相が支持する友愛党（ハドバ）に対する評価は高かったようだ。その一方で、地方行政を任されても実績がでなかったと受け止められた SICI への支持は低くとどまったようであった。イラクの歴史は常に中央と地方のせめぎ合いであるが、中央で権限を有する首相の政党が地方で一定の支持を受けることは、ある意味での安定に貢献することは確かであろう。また、さまざまな問題が残る中で、今回の選挙では争点を暴力ではなく、民主的に争ったことは評価できる。

3. 選挙の評価

20 日、イラク独立高等選挙委員会は、表 1 の通りの最終発表を実施した。選挙の評価は以下の通りである。

(1) マーリキー首相系の躍進

今回の地方議会選挙において目立つのは、マーリキー首相のダアワ党の躍進であろう。分裂を繰り返した結果、マーリキー首相のダアワ党は現在、国会の 280 議席のうち 6 議席しか抑えられていない。その一方で、「米軍なきあとのマーリキー」がどうなるのかは、イラクの今後を占う上で極めて重要であろう。このような中で治安回復の手腕を強調し、うまく広報戦術を進めてきたマーリキー首相は、躍進に成功したということができよう。また、当初から支援を表明してきたニノワ県のハドバー党のみならず、当面のライバルである SICI に対抗するために、サドル勢力との連立の可能性も示唆しており、これらを加えると、14 県中 6 県で第一党となるが見込まれる。しかしながら、強引な手法を繰り返してきたマーリキー首相に対する批判も根強い。

選挙の結果、再び「イラク・ファースト派」と「宗派・民俗・ファースト派」がしのぎを

通りの比較が可能である。なお、届け出のリストの枠組み等が異なるため、この表は必ずしも正確に比較を可能にさせてはいないので、あくまで参考にとどめていただきたいが、クルド系を黄色、スンニー系を緑、シーア系を青に色分けしてある。

表2：県別の地方選挙得票率比較

県名ノグループ名		クルド (KDP+ PUK)	友愛党	サドル 勢力	ダアワ 党 (マーリ キー)	SICI	ファ デー ラ	INA+共 産党	合意戦 線(含む イスラーム 党)	対話戦 線	ダアワ 党(ジャ アファ リー)	その他	県知事
ニノワ	05年	75.6%				12.2%			4.9%			7.3%	
	09年	35.3%	55.9%						8.8%				
サラフ・ツ＝ディーン	05年	19.5%		4.9%	7.3%			7.3%				61.0%	
	09年				7.1%			17.9%	17.9%	10.7%		46.4%	
ディヤラ	05年	17.1%			48.8%				34.1%			17.1%	SICI
	09年	20.7%			6.9%	6.9%		10.3%	31.0%	20.7%	3.4%	0.0%	
アンバル	05年								70.7%			29.3%	
	09年							6.9%	20.7%	20.7%		51.7%	
バグダード	05年			2.0%	21.6%	54.9%	11.8%	3.9%				5.9%	SICI
	09年			9.1%	50.9%	5.5%		9.1%	12.7%	7.3%	5.5%		
バーベル	05年											100.0%	
	09年			10.0%	26.7%	16.7%		10.0%			10.0%	26.7%	
ワーシト	05年			75.6%	9.8%			4.9%				9.8%	Sadr
	09年			10.7%	46.4%	21.4%		10.7%				10.7%	
カルバラ	05年				51.2%	12.2%						36.6%	SICI
	09年			14.8%	33.3%	14.8%						37.0%	
ジ・カール	05年				26.8%	26.8%	9.8%				24.4%	36.6%	SICI
	09年			22.6%	41.9%	16.1%	6.5%				12.9%		
ナジャフ	05年				46.3%	4.9%	7.3%					41.5%	SICI
	09年			21.4%	25.0%	25.0%					7.1%	21.4%	
カーディシーヤ	05年			7.3%	4.9%	48.8%	7.3%	7.3%			7.3%	24.4%	SICI
	09年			7.1%	39.3%	17.9%	7.1%	10.7%			10.7%	7.1%	
ミーサーン	05年			36.6%	2.4%	14.6%	9.8%				12.2%	36.6%	Sadr
	09年			25.9%	29.6%	29.6%					14.8%		
ムサンナー	05年				9.8%	19.5%	14.6%	12.2%				43.9%	Da'awa
	09年			7.7%	19.2%	19.2%					11.5%	42.3%	
バスラ	05年				7.3%	48.8%	29.3%	9.8%				4.9%	Fadhila
	09年			5.9%	58.8%	14.7%	2.9%	5.9%	5.9%			5.9%	

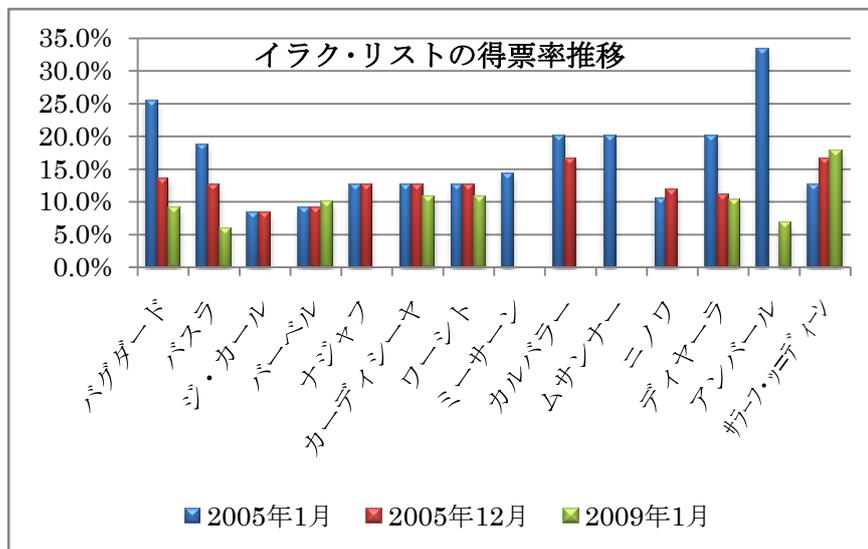
スンニー派が主流を占める地域で逆に獲得票を減らしたのは、人口に比して多くの議席を獲得してきたクルド系およびシーア派系政党であった。また、イスラーム党は大幅に票を減らす可能性も指摘されてきたが、部族勢力を取り込むことにより、一定の得票を維持したようである。他方、アンバル県では、取り込むことのできなかつた部族勢力が選挙の不正を理由にイスラーム党を敵視しており、武力衝突も辞さない構えを見せている。

(3) 宗派・民族対立の行方

イラクにおける宗派・民族対立はいまだに解消したとは言えない。問題を先送りしている中でも、重要になりそうなのは、キルクークの帰属である。今回の選挙に際しては、クルド地方議会を有するクルド地区に加え、キルクークの所在するタアミーム県の議会選挙が先送りされた(クルド地方選挙は5月に予定されている)。巨大油田のあるキルクークに対しては、クルド人、アラブ人、トルコマン等が領有を主張しており、潜在的な係争地になっているが、クルド側は、憲法140条(07年末までにキルクークの帰属を決める住民投票を実施する条項で、現在まで未実施)にしたがい、住民投票を実施して県議会選挙をおこなえばいいと主張していた。これに対してアラブ人等は、今の状況で住民投票を実施すれば混乱は必至であり、とりあえず民族別にクォータを決めたうえで、県議会選挙を実施するよう提案した。これにクルドが反発し、地方議会選挙法の制定が遅れ、昨年10月に実

施するはずの選挙自体が 1 月にまでずれ込んだうえに、タアミーム県の選挙は当面先送りされた。タアミーム県の帰趨については 3 月末までに合意に達することになっているが、問題の解決は容易ではなく、今後は民族対立に焦点があたる可能性が高まっている。

一部の報道等では、国民は宗派・民族対立に嫌気がさしており、宗教政党の後退および世俗政党の躍進が顕著とされている。確かに国民は宗派・民族対立に嫌気がさしているが、世俗政党の躍進とまで断言はできないように



も思われる。前回の選挙に参加しなかったスンニー派世俗系政党が票を伸ばしたり、部族色の強い政党が躍進したのは事実ながら、世俗政党として代表的なイラク国民合意 (INA) 等の連合であるイラク・リストは、票を伸ばしていないばかりか、過去 2 回の選挙と比較しても得票率を後退させているのである (表 3 参照)。

(4) 今後の不安材料

イラクの地方議会選挙は総論として成功であったように思われる。しかしながら、前述の不安材料に加えて、まだいくつかの不安材料が残っている。第一に、マーリキー首相が選挙での勝利に乗じて、これまでと同様あるいはそれ以上に強硬に出る場合、それに対する反発がどうなるか。第二に、イランの影響力強化に向けた巻き返しがあるのか。第三に、地方選挙は国政に直接影響しないとしても、今後の政治的連立等にかなる影響を及ぼすか。そして第四に、敗北した政党が治安を含む権限を円滑且つ平和的に勝者に対して渡していくのか。特に、現在の県知事が第一党の手に渡る場合、すべての県で県知事が変わる状況にある中では、この問題は小さくない (表 2 ご参照)。